

Special Feature

## D.I.Y. & Cost Control Design

付加価値を生み出す  
コストコントロール設計手法

Feature Article

### Bakery

ベーカリーカフェ&新世代のパン専門店

### Sushi Restaurant

現代の寿司空間

Report

ミラノ・デザイン・ウィーク 2018



# 家具

# と

# 空間

VOL.  
14

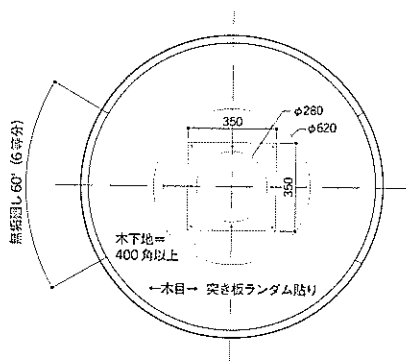
空間の「物語」を紡ぐ  
「カスタムファニチャー」  
のつくり方

空間デザインの背景まで探り  
家具の制作に落とし込む

「セルリアンタワー東急ホテル」 × 松浦裕三  
blue quince

都市の「顔」となるグランドホテルは、常にどこかの空間でリニューアルプロジェクトが進行しており、新たな「化粧」を施しては訪れる人々を迎える。設計を手掛けるGARDE (18年4月号P.197)の包括的なディレクションによって、2014年から客室や共用部のリニューアルを進める「セルリアンタワー東急ホテル」を例に、松浦裕三さんに家具の制作プロセスを聞いた。

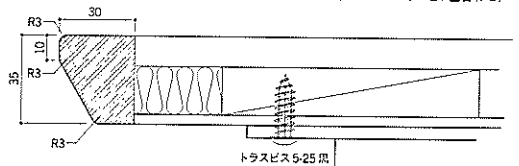
取材・文◎大宮 力



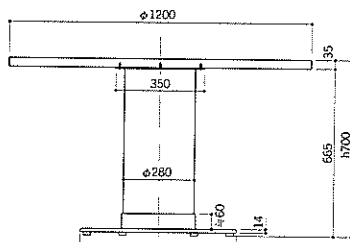
## ラウンドテーブル

地下1階「宴会予約サロン」のラウンドソファのために制作された丸テーブル。木口は、無垢板を挽いて四周に回す方法では、3mm程度の薄板になってしまい貧弱になるため、円を6等分した曲率の35mm厚のパーツをNC加工機で切り出し、貼っている

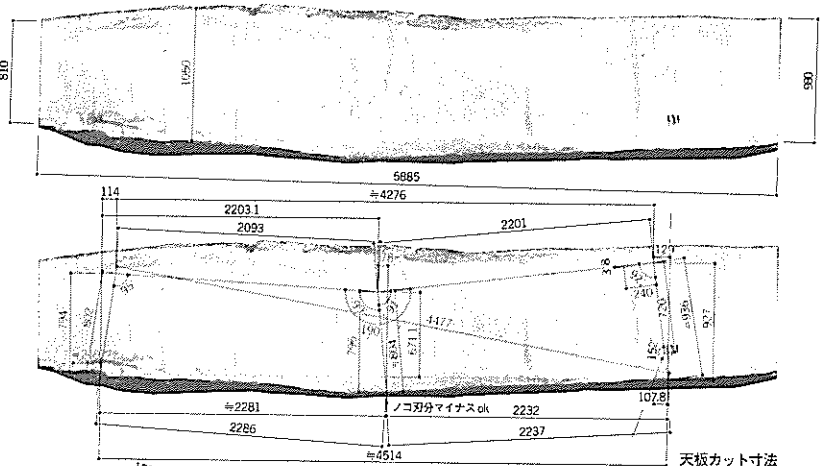
仕様  
天板：ウォールナット材突き板(板目)  
木口：無垢材し130  
脚：スチール黒粉体塗装(既製品仕様)  
仕上げ：オーダー染色 U.C(ベルリオン SW-24 色合わせ)



ラウンドテーブル 天板詳細図 1:3



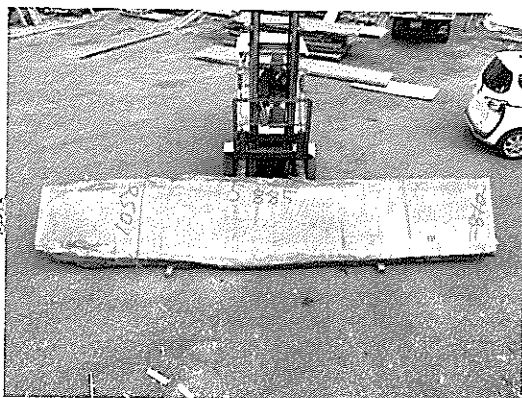
ラウンドテーブル 詳細図 1:30

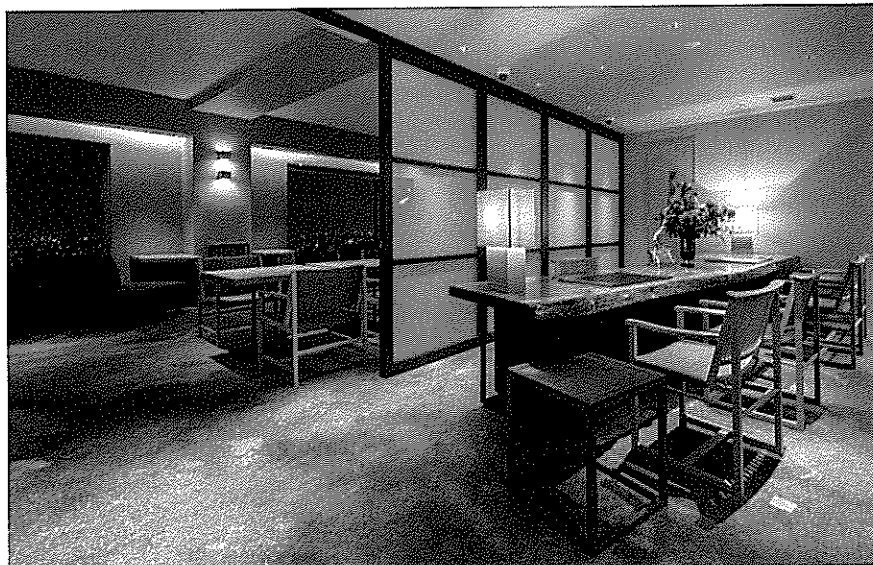


レセプションカウンター  
天板木取り検討図 1:60

## レセプションカウンター

35階「エグゼクティブラウンジ」のカウンター天板。ピン材の耳付き一枚板は、東京・木場の材木屋で購入したもの。検討の際、真偽識のように垂みを修正した写真に寸法を書き込み、どのように木取りをするかを検討していった





左上 / 「セルリアンタワー東急ホテル」の地下1階「宴会予約サロン」の打ち合わせスペース。「Japan Exclusive ~日本の上質なおもてし」という空間コンセプトを踏まえ、テーブル及びイスがデザインされた 左下 / 同サロンのラウンドソファ。ファブリックのグリーンは、日本の伝統色を基にしたカラースキームから導き出された(2点写真提供 / セルリアンタワー東急ホテル) 右 / 35階「エグゼクティブラウンジ」のレセプションカウンター。天板は、ブピンガ材の耳付き一枚板(写真提供 / GARDE)

## デザイナーの意図を受け 最善の制作方法を探る

東京・渋谷の「セルリアンタワー東急ホテル」のリニューアルプロジェクトに松浦裕三さんが最初に関わったのは、2017年7月から実施された地下1階「宴会予約サロン」である。改装のメインテーマは、「Japan Exclusive ~日本の上質なおもてなし」。GARDEの設計の下、松浦さんが制作した打ち合わせ用テーブルやイス、ソファなどにも、日本の伝統色からイメージしたカラースキームが展開された。

打ち合わせ用テーブルは、当初の空間パースでは木製の脚が想定されていた。しかし松浦さんは、スピード感が求められるホテルのリニューアルプロジェクトにおいて、各家具のデザインとコストを相対的に判断した結果、鋼材を提案した。鋼材ならば断面寸法を抑えつつ、溶接など平易な接合方法で強度を確保できる。松浦さんは独自に制作した鋼材のサンプルをそろえおり、GARDEと仕上がりを共有しながら、見た目と強度のバランスが取れた寸法を決めていった。

このテーブルの天板には、ウォールナット材の突き板が貼られている。課題となったのが、木口の処理だ。安価に済ませたいのなら、木口にも突き板が貼られることになるが、天板の角でアールが取れなくなってしまう。次善の策として、3~5mm厚の挽き板を回す手法もあるが、やや高級感が不足してしまう。そこで、10mm厚に無垢板を挽き、四周に回すこととなった。

ソファと組み合わせられた円形テーブルの木口は、更に手が込んでいる。無垢板を周囲に回しても、薄板になり木口が貧弱になる。そこで、円を6等分した曲率の35mm厚のパーツをNC加工機で切り出し、木口に貼っている。

## 一枚板の木取りのイメージを 空間デザイナーと共有する

「セルリアンタワー東急ホテル」における松浦さんの次のプロジェクトが、18年1月から実施された35階「エグゼクティブラウンジ」のレセプションカウンターである。GARDEからの依頼は、耳付き一枚板の天板が「くの字」になったデザイン。プレゼンテーションから納品まで1カ月程しかなかったため、承認を得たら即座に制作に入る必要があった。そこでまず松浦さんは、東京・木場の材木屋に足を運び、乾燥済みのストックから材を探した。

「ちょうどイメージに近いブピンガ材が見つかり、木目の通りも良く感じました」

一枚板は、木取りをすると変更は利かない。そこで松浦さんは、その場で一枚板の写真を撮影。歪みを直した後、木取りを指示した資料を作成して、GARDEの確認を得た。

一枚板の家具の制作は、入手が最も重要になる。使用する材料が決まれば天板の設計自体はそれほど大変ではないという。

「天板は、言わば大トロ。仕入れが良ければ、良いものになります。腕の見せどころは、マグロに添えるツマヤワサビです」

ツマヤワサビに相当するのが、幕板や脚である。幕板は、客側からはビスが見えない固定方法を検討した。脚は、格子状の空間デザインを生かすため、パイプの断面寸法をなるべく細く抑えられるように仕上げています。

## さまざまな試作を重ね 精度を高めていく

前述の通り、松浦さんは平面図や空間パー

スに描かれた家具を、そのまま形にするやり方を取っていない。各部の寸法が性能および機能上で適正か、家具単体で見た時のプロポーションはどうかを確認する。空間パースの印象が良くても、家具だけ取り出すとSH(シートハイ)やSD(シートデプス)が適正ではない場合も少なくない。

これらを検証するため、まず家具のための空間CGを制作することが多いと言う。人が座った時の雰囲気や見えない箇所もつくり込んでいく。この作業は、「家具の形や大きさが運用方法と合わない」、「既存の家具と組み合わせた際にデザインがちぐはぐだ」といったクレーム回避にもつながるといふ。また、CG化により検討が緻密になり、クライアントも家具のイメージが掴みやすくなるメリットもある。

その上で、松浦さんは家具の使い方について想像を巡らせる。オペレーションはクライアントか、別の会社なのか。客単価や客層はどうか。これらを見極め、寸法やディテール、仕上げを調整していく。

これだけ念入りに検討しつつ、更に試作品を制作する。試作により、性能や機能を保てるぎりぎりの寸法を探り出していく。何より、ソファやイスにとって最も大切な座り心地を検証できるため、自信を持って提案できることが大きいと言う。

「図面としては完璧にまとまっても、改良すべき点は絶対に残っています。実物を制作し、細部を手直しすることで、初めて完成品になると考えています」

家具の完成度を高めるには、さまざまなツールを用いた多方面からの検証が重要になる。松浦さんのアプローチは、コントラクト家具を手掛ける際に大いに参考になるだろう。